

韓国朝鮮における干潟の民俗と表象

宇田川 飛鳥

慶應義塾大学大学院社会学研究科 後期博士課程

近代科学は、自然と人間の存在を分離させることで客体としての「自然」を利用し支配してきた。現在では陸域と水域の移行帯（エコトーン）として評価される沿岸干潟も、近代においては不完全な環境として埋め立てや護岸工事が行われてきた。しかし現代、地球環境の悪化が問題視されるなかで、干潟の文化的価値や生物多様性が「発見」されている。本発表はこうした背景を前提に韓国朝鮮を事例として、干潟の文化の構築と共通理解を目指すものである。報告には次の三点の射程がある。第一に、韓国朝鮮において看過されてきた沿岸干潟の民俗の掘り起し。第二に、近代日本からの朝鮮半島の干潟への眼差しと、現地における民俗事象を取り上げ干潟の文化構築の可能性と留意点を提示すること。第三に、干潟の文化的価値の構築に向けての考察である。

現代韓国における干潟の表象は「well being 健康」であり、干潟の泥土を肌に塗布すると良いと宣伝され、健康志向と相まって周知の事実となっている。これは現代において「発見された」利用であり「人体に良いこと」が湿地保全の理由付けとなっている。では、過去にはどのような干潟における活動があったのか。生業から信仰まで幅広く確認されてきたなかで、本発表では「渡る」行為に注目したい。「渡る」行為の象徴的な民具に、潟板がある。泥質干潟が発達している地域では干潮時に軟泥の干潟が出現し、船や徒歩での渡渉が困難となる。この時、利用されたのが潟板である。海でもなく陸でもないために発生するこの困難—「大規模」な自然利用の困難—が干潟の文化をめぐる特徴ではないかと発表者は考える。海洋人類学者である西村朝日太郎が提唱した干潟文化も潟板と石干見が中心であった。そこで、西村の潟板文化とは異なる視点から干潟を「渡る」行為について報告したい。

干潟に暮らす人々にとって、干潟は自明の環境であり特別視するものではなかった。むしろ外部者（都市住民、学者、宣教師、軍隊、旅行者等）の眼差しによって干潟は可視化される。そこで、本報告では植民地期の朝鮮半島の干潟への日本からの眼差しを検討する。昭和十一年、南道多島海を訪問した文化人類学者の秋葉隆、民俗学者の櫻田勝徳らは、これらの島々では干潮時には渡渉し、満潮時には渡船で移動すると記録している。秋葉は干潟になった海底を「踏んで進むのは少年時代の水遊の快感が蘇って来る快さ」（『朝鮮多島海旅行覚書』1939年）と記している。当時の学者らが、朝鮮と日本の干潟をめぐる心象の親和性と民俗の共通性を見出していたことが分かる。次に、開拓者の視点を見てみたい。不二興業会社社長であった藤井貫太郎は「朝鮮に來た時から將來此干潟地の干拓が非常に有望だと着眼すると同時に此潮汐干満の差を利用して水力電氣發生の原動力たらしむる研究をした」（『朝鮮鐵道協會會誌』1930年）と述べる。技師關屋忠正（東洋拓殖株式会社土木課長）も「朝鮮には干潟地は到る所に在ると云つていゝ程多い、而してそれが多くの工事費を投ぜずして、直ぐにも何とか利用が可能そうな、格好な地形の良い所が多い、それで事業家の目に着き易く、看々天興の豊土を自然の儘に放棄することの如何にも惜しい様な感を起こさせる」（『朝鮮及満州』1920年）と述べている。朝鮮半島の干潟が日本人実業家たちにとって、宝の山であった様子が伺える。さらに別の視点を提示したい。明治中期以降、軍事目的で作成された外邦図のひとつに朝鮮総督府による地図がある。大正七年発行の地図「扶安」（現全羅北道扶安郡）の沿岸部を注意深く見ると興味深い記載が見つかった。干潟地に「徒渡者」の表記があり、それは「干潟の道」に存在した休憩所を示していた。

発表者はその地図を手掛かりに現地で情報を収集した。地図にある干潟は干拓によって消滅しており、また「干潟の道」に関する学術的記録や調査報告は管見の限り見つからなかった。しかし現地での聞き取りによって、かつて当該地域に干潟用の渡船があったこと、満潮時に避難するための高台（休憩所）があったこと、陸地に渡る「干潟の道」が存在し、これらは住民の共通の知識であったことが分かった。1970年以前の出来事として多くの住民が干潟を「渡る」ことを記憶し、「干潟の道」の消滅を抵抗できない結果として解釈した上で、懐かしさと共に当時とても不便であったことが語られた。

本発表の射程に戻りたい。現代韓国の干潟の表象には、干潟で暮らしてきた人々の生活の知恵は抜け落ちていた。本発表で「渡る」行為に注目したのは文化の多様性を示すためである。（第一の射程）

また植民地期の資料を基に、外部からの三種類の眼差しを提示した。ひとつは、牧歌的な「自然との暮らし」を見た学者たちの視点であり、二つ目は有望な干拓候補地とみた開拓事業家たちの視点である。三つ目は「渡る」ことに集中した結果、最も詳細な干潟の地図を残した日本帝国の測量部の視点である。この地図を基に「干潟の道」をめぐる暮らしを発見したことを述べた。（第二の射程）

干潟の文化的価値の構築作業は、干潟の文化の掘り起しと、価値づけを大別して進行する必要があるだろう。本発表で扱った植民地期資料は負の遺産であるが貴重な歴史的価値も有している。こうした資料の利用や、地元の多元的な干潟の認識を普遍的評価へと昇華させる作業において、干潟も歴史性と政治性を有していることに私たちは気づかされるのである。（第三の射程）